

「本当の自分はどこかにいるのか？」

2014 年 5 月 17 日(土)

会場：Alba Cafe (外苑前)

参加：15 名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・新規参加者 2 名を含む総勢 15 名で「本当の自分はどこかにいるのか？」をテーマとして、主に「本当の自分とは何か?」、「ありのままの自分とは何か」について考え、対話した。

2. 対話：

(0) テーマについて

- ・村上春樹氏のエッセイ“本当の自分”、トヨタ自動車“ハリアー”のテレビ CF を紹介し、私達の身近で良く見かける「本当の自分がどこかにいるのか？」を問いに設定した。

(1) 本当の自分を意識するときはどういう状況が考えられるか？

- ・どこまでの範囲を考えるのか。いるとすれば、洋画“マトリックス”のように「水槽の中の存在＝意識は脳のみ」にいる。あるいは、映画のように極端でなくとも、自己の「無意識」にいるとも考えられる。

(2) 「本当の自分」とは何か？

- ・逆ににせものの感を考えてみる。人生の大きな岐路で、思い描いていた方向と違う方向へと進んだとき、現状の不満が想像させる良いと思われる方向、別にあったはずの方向を本当の自分と思うことがないか。
- ・“俺はまだ本気出してないだけ”という邦画があったが、現状の情けない不満が「こんなはずはない」、「どこかに本気を出した理想の自分があるはずだ」、と思わせるのではないか。
- ・それぞれの場面（例；職場、家庭、友人同士）に応じて、人は違う顔を持っているのではないか。そうするとどれが本当なのだろうか。
- ・プラスやポジティブなことを考え出ただけなら幻想であり、本当とは思えない。何か作為的なものを感じるはずである。
- ・写真に映った自分の顔を見て「こんなはずはない」と思うことがある。客観的に考えれば、『写真』の方が本場で、『自分が違うと思った比較となる元の像』が幻想となるはずだが、そうとは思えない。
- ・第一志望 A 大を落ちて B 大に進学した後『A 大に進学したであろう自分』を『より良い自分』と考えてしまう。写真も同様で『写真に映った自分』よりも『より良い自分』を想定し本当と思うのではないか。
- ・自分が持つ自己イメージと周りの人が持つイメージが食い違う場合がある。その場合に自己紹介のときに困る。他人の前で幾つかのフリをしていることがあり、幾つもの自分がいて、どれも自分っぽくない。→そういう場合にも、幾つかの自分をまとめる自分があるはずではないか。

(3) ありのままの自分とは何か？

- ・進行から、映画“アナと雪の女王”挿入歌“ありのまま”を紹介、この歌がなぜ受けるのかと提起した。
- ・“ありのまま”の姿では枠（規制）が厳しく社会生活が営めない。ありのままを周りの人々に出すことについて疑問がなければ、この歌が受けることもないはずである。
→社会生活の枠は、世間体を作り出し、周りの人々との衝突の緩和を担っている。
- ・ありのままの自分を『表現すること』と『認めること』は違うはずである。表現しても大丈夫なのに、表現しないこともある。それは、ありのままを受け入れられているか受け入れられてないかに関わる。
→その場合のありのままを受け入れる主体は、自分、周りの他者、社会等、一体誰なのか。一義的には自分ではないのか。その場合の自分は、本当の自分なのか？
- ・自分には、意図的な行為をする『主体的な自分』とそれを冷静に観察する『メタ的な自分』とがいる。周りの他者とメタ的な自分は対等である（扱うことができる）。このメタ的な自分が本当の自分なのか。

(4) 自然な自分が本当の自分か？

- ・普段あまり怒らない性格だが、ときに『怒る自分』はありのままである。一方、怒らない『自然な自分』もいる。ありのままの自分は状況によって変わるが、それを静かに観察している、自然な自分というのがあるように思う。それは、理想の自分というのとも違い、普遍的な本当感があるように思う。
- ・その考えは、自分という概念とは何かとの問いに最後は行き着くはずである。洋画“トータルリコール”に出てくる頭の中の小人を想定しなくてはならないのか。だがそうだとすると、それを統合する自分を想定しなくてはならず、その統合する自分とは何か？という問いに行き当たり、振り出しに戻ってしまう。

3. まとめ：

- ・「本当の自分」を納得できるまでは深められなかったが、「鏡に映った自分」や「自然な自分」という興味深い論点が出てきて有意義であったと思う。また挑戦したいテーマである。

以上